

回しで行うしかない。従業員が交代で行ったが、手動では10回回して1ℓ程しか汲み上げられず、大変労力を要した。当時、BDF燃料の備蓄は約1万4,800ℓもあり、3月29日までにのべ85回、計4,800ℓを使った。さらに工場への給水事業を柱としている組合は、BDFのPR用発電機を使って水を汲みあげ市民に提供した。

電気が回復した19日からは、組合員の工場の冷却塔に給水し、冷凍庫の食材を守ることができた。4月7日の余震時も同様に、PR用発電機が市民への給水に大きな役割を果たすことになった。会社組織としては、震災から1ヶ月程は緊急支援を中心に尽力し、ライフラインがすべて復旧した頃には、組合の方々の安否確認、被害調査等を行った。震災後1ヶ月程はガソリンが枯渇している状況だったので、従業員を3班に分けて乗り合わせることにし、3台ある社用車は通勤に使用した。

震災から半年過ぎて…

他県から来たボランティアの方々にいろんな事をしてもらい、救援物資をいただいた事は大変感謝の思いがある。また、臨時給水所として水を供給した時など、従業員は大変だったと思う。ライフラインが戻ると震災が起こった事さえ忘れがちだが、あの大変だった思い、辛かった思いは決して忘れてはいけないと思う。当時は辛いと思う余裕

すらなかった。

BDFの大口排出事業所であった揚げ蒲鉾工場など数軒が工場を流され、月3万ℓを目標としていた原料の回収量が半分以下になってしまっている。冬場は回収量が多いので、震災当時ストックしていた事が緊急時に幸いした。普段はあまり地域の人たちと話す機会がなかったが、今回臨時給水所を開設した事で住民の方とコミュニケーションをとれたことや、感謝してもらえたことは大変嬉しく思っている。



大学

仙台市

「新しい暮らし」を自分達で生み出し、 地元「エネルギーの駅」を作ろう

中田 俊彦 東北大学大学院工学研究科技術社会システム専攻 工学博士

取材日 2011.12.13

地域エネルギーシステムのデザイン、エネルギー経済工学が専門。東北経済産業局東北地域再生可能エネルギー活用事業アドバイザーボード委員長など、各種エネルギーに関する委員等を務める。研究室ではエネルギーの有効利用と環境配慮型社会への貢献を目的に、熱サイクル評価とエネルギーシステムの設計に取り組む。

3月11日 14時46分

青葉山にある大学の3階会議室で打ち合わせをしていた。揺れ始めて2分程が経過しても、揺れている。3分が過ぎた頃には揺れが次第に大きくなったので、机の下に潜って揺れがおさまるのを待った。しかし揺れはおさまるところが増す一方で、やがて停電になった。吊るしてあった観葉植物は大きく揺れて、土が地面に落ちる。建物の継ぎ目から土埃が出ていて、まるで炭鉱の中にいる

ようだった。昭和39年頃に建てられた青葉山で一番古い建物は、正直潰れてしまうのではないかと恐怖を覚えた。とにかく怖かった。

5-6分後、揺れがようやく落ち着いたので避難場所であるテニスコートへ避難することになった。100-150名程の学生や大学関係者が避難していた。屋外での点呼と待機が続き、ようやく1時間半後に、研究室がある工学部総合研究棟へ歩いて戻ることになった。制震構造が入っている最新構造の建物だったので、外観では大きな被害はな

かった。停電でエレベーターが止まっていたので、非常階段を上り8階の研究室へ戻った。ところがドアが開かない。なんとかこじ開けると、ドアの向こうは本棚や備品が倒れて通路を塞ぎ、本やファイルが散乱していた。机に置いたままだった携帯電話や財布が落下し書類の下敷きになっていて、夕闇の中で探し出すのに苦労した。

ライフラインの復旧まで

もう日が落ちかけた午後5時半頃、中心部に向かうための道は大渋滞が起きていた。車のテールランプが長く連なっている。主要道路を迂回して自宅に向けて車を走らせた。信号はもちろんすべて消えていた。ところどころ道路に段差もできていたが、何とか2時間半かけて午後8時過ぎに自宅に戻ることができた。車中でラジオをかけて初めて、東北全体で大規模な停電が起こっていることを知った。絶望感とあきらめの念に襲われ、自分ひとりの力ではどうにもならないという思いがした。

家には暗闇の中、妻と娘2人がいた。この夜から布団3つに4人が寝る日々も2週間ほど続くことになる。妻がお風呂や入れられるものに水を溜めていてくれた。その夜は家族4人、1階の和室で一緒になって不安な夜を過ごした。朝6時頃に夜が明けはじめ、朝日が出始めるのがとても嬉しく思えた。朝食は、常にごはんを冷凍していたので、卵おじやにして食べた。いつか使うだろうと用意してあった石油ストーブを出して、タンクに備蓄していた石油を給油して暖をとった。朝食後に外へ出ると、隣家のエアコンの室外機が動いているのが見えた。急いで家に戻って慎重にブレーカーをあげてみると、電気が復旧していた。3日後に電話、テレビ、インターネットが、5日後に水道が復旧した。他の地域に比べるとライフラインの復旧は早かった。

震災時は春休み中であつたが、20,000人を超える学生に対して、大学職員、教授、助教授が手分けし学生全員に連絡をとり、安否確認をするとともに急いで仙台を離れて遠方の実家に避難するよう指示した。幸いに、学生全員の無事を確認することができた。学生のケアを最低限できたことは、大学としては大変な手順であつたがとてもよかったと思う。

週明けに臨時の教員会議が行われるので、泉パークタウンから青葉山まで15kmほどの道を自転車で通った。でも気分は嬉しかった。頑張るしかないとの思いが強かった。職場に向かう途中、ガソリンスタンドの水道から水が出ているのを見つけた。思わず水を求める人々の列に並んだ。シャンプーもなかったが頭を洗いたかったので、戦時中



はこうだったのだろうと思いながら、嬉しくて無我夢中で頭を洗った。2回目の会議では、片道通常1時間のところを3時間かけてバスを乗り継いで通った。往復6時間かけては仕事にならないので、3回目の会議招集では、自家用車に残ったガソリンを使って高速道路経由で通勤することにした。途中、病院帰りの高齢者を同乗させたこともあった。

学生の避難と職場の復帰スケジュールを確認した後で、食料や灯油のライフラインが未復旧の自宅を離れて横浜の実家へ身を寄せることにした。妻と娘は東京の実家へと家族別々に避難した。移動には高速バスを利用したが、インターネットでもなかなか予約することができなかった。東北を脱出できることで、一時的にとっても救われた気持ちになった。早朝5時に新宿へたどり着いてショックだったのが、辺り周辺が計画停電の影響で真っ暗だったことだ。実家に向かうために乗った小田急線の車内灯も真っ暗だった。当時は関東でもガソリンスタンドは渋滞、食料も手に入りにくい状況が続いていた。その後、仕事のために仙台に戻った頃には、自宅のガスも復旧していたし、ガソリンスタンドの渋滞もなくなっていた。

震災を振り返って

僕らはもっと怒るべきだと思う。あんまりにも大人しいし、優しすぎるし、東京や大阪、北海道などは普段の生活に戻っている。東北の人たちはもう大丈夫だよと自然に言わざるを得ない状況は変だと思う。こんな変な体験をしたことは、悲劇だし、悲惨なことだ。めったにできない経験もした。みんなが辛かった。今後はそれを地域づくりに活かして、これまでとは別の舵をきるチャンスであると思う。決してUターンしたり逆方向に行くべきではない。

明治から140年間、日本の地方自治体では「エネルギーをどうするか」ということを考えること

はなかった。政府主導で大きなインフラをつくり、電力、ガス、石油のネットワークはすべて経済産業省エネルギー庁が担当していて、良い意味での中央集権だった。だが、日本のどこで何が起こるかわからない時代である。エネルギーがないと人間は生きていけない。ならば、最低限生き伸びられるように、地元で「エネルギーの駅」を作ることが必要だと考える。燃料電池や充電器が学校や公民館など地域にあれば、基幹のインフラに何かが起こった時、自立運転ができる。エネルギーを備蓄しておけば、いざという時に必ず役立つだろう。

避難所はトイレがあるだけの場所が多かったが、テレビニュースが見られるエネルギー源だけでも自給できれば、避難所の状況は大きく変わるだろう。自分達の暮らしを守る、家族の命を守るために、地域エネルギーシステムの整備は今一番必要な事だと思う。

「新しい暮らし」や「新しい社会」を自分たちで生み出していかなければならない。前に戻るのではなく、別の道を見つけていかなければならない。3年-10年かけてでも、外国の良いところ、東北と同じように寒い北欧の人たちがどんな豊かな生

活環境をしているのかを視察し、何かを感じてみるのもいいと思う。東北の自分たちは自然が豊かな場所に住んでいて、バイオマスをはじめ多くの大事な資源が豊富にある。今あるインフラと結びつけて、「宮城版」「東北版」モデルを作ることは難易度が高いとも思う。目の前にそれだけ高い課題が待っていることを頭の中に入れておかなければならない。



個人

「自然と共に生きる農業」のこれから

名取市

三浦 隆弘 なとり農と自然の学校

取材日 2012.2.16

セリ、ミョウガタケなど来野菜を作る農家の7代目。朝市夕市ネットワーク、NPO介在型市民農園「プチファーム」、公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク(MELON)、(特活)ほっぶの森びすたーリフードマーケットの農業就労支援などの活動に参画し、食と農のつながりづくりに取り組む。オープンファーム「なとり農と自然の学校」主宰。

3月11日 14時46分

3月11日は栗原市瀬峰にある農業試験場で、トマト栽培の研修を受けていた。栗原は震度7の揺れを記録した場所だ。平屋の1階にいたが、揺れがひどくガラスが割れた。50名程の参加者はすぐに駐車場に避難したが、立ってられずしゃがんだり、植えこみの木につかまっていた。池の水面もばちやばちと激しく揺れていた。

研修会は即座に終了、現地解散となった。

車載ラジオを聞き、ツイッターを見ると10mの津波警報が出ていた。とにかく家に帰ろうと、ラジオを聞きながら名取へ向かった。山方向を行けば良かったのだが、気が動転していて瀬峰から田

